

陳述書

2025年10月7日

住所



署名



- 1 提訴から2年近くが経過しました。その間に私が感じ、考えてきたことをお話しいたします。

- 2 まず、私にとって、不妊手術という避妊手段がどれほど大切なもので人生に欠かせないものか、その思いが国には全く伝わっていないのではないかと感じています。私はいま低用量ピルを服用しています。以前は、長期的に服用を継続することを想定して、副作用が少なく長期服用が可能な超低用量ピルを使っていました。体質に合わなかったのか服用時間が30分から1時間ずれるだけで不正出血をすることが度々あり、低用量ピルに切り替えました。毎日同じ時間に服薬する手間や、不正出血などの副作用があることも不快ですが、一番つらいのは、妊娠しない体を保つためにずっと継続的に服用を続けていかなければならない、そのこと自体です。薬を飲むたびに、そして生理が来るたびに「自分は妊娠してしまう体を持っている」「1週間飲み忘れたらどうなるだろう」と嫌になる瞬間があり、そう思ってしまうこと自体が苦痛でなりませんでした。また、私はPMDD（月経前不快気分障害）の症状が強く、夜になると衝動的に何かに八つ当たりすることがかつてよくありました。そうした症状は、単にホルモンの問題というだけでなく「妊娠できる身体であること」からくる精神的苦痛に根ざしているのではないかと感じています。自分の身体のせいで「この世からいなくなりたい」と思うこともよくありました。

私にとって、妊娠しない体を持つことは「完全な自分」になるために欠かせない条件です。ピルによる避妊は確実性に欠ける上、閉経まで毎日投薬を継続しなければならず、しかも40歳を超えると処方されなくなる可能性が高いなど大きなデメリットがあるため、ピルが不妊手術の代わりになることはありえません。不妊手術を行うことで、自分の身体に対して持っている危

機感や嫌悪感は大きく変わると思います。

- 3 また、不妊手術をすると「後悔する」として、国は、不妊手術を規制していることを正当化しているようですが納得できません。これは、女性は「子どもを産みたいと思うものだ」、「子どもを産み育てるべき存在だ」という偏見、パターンリズムの表れだと思えます。以前、クリニックでピルの処方相談したときですら、医師から「そもそも、なんで生理を止めたいの？ 必要ないでしょう」と言われたことがありました。男性のパイプカットが黙認され広く行われていることと比べると、扱いに大きな違いがあると感じます。日常生活も同じです。普段接する人たちにライフプランを話すと、「夢を追いかけていいね」というような反応のあとに、「でも彼氏はいるの？」「結婚はどうするの？」といった会話になり、その先には必ず「子どもは持たないの？」という質問が続きます。こうした人々の偏見は「ガラスの天井」のように目には見えませんが、確かに存在します。私は、現在の不妊手術を規制する不合理な制度や運用の根底に、まさにこのような考え方があると思っています。その結果として、女性は子を産みたいと思うものであり、子を産み育てる存在だと決めつけられ、一人の人間として尊重されるべき選択や意思決定が軽んじられる状況に置かれています。私は、この訴訟を通じて、国に対しこうした偏見に一刻も早く気づき、認識を改めてもらいたいと強く願っています。

- 4 配偶者等の同意を求めるルールについてもおかしいと感じています。実際に私もその問題に直面したことがあります。かつて、当時のパートナーとの間で避妊に失敗し、妊娠の可能性を考え、その場合には中絶が必要であるとの思いから医療機関を受診し、相談したときのことです。医師からの説明で「中絶手術を受ける場合には、パートナーの同意が必要です。パートナーはこのことを知っていますか」と確認されたことがありました。結果的に妊娠

していないことが分かりましたが、受診時の医師からの説明を聞いて、「自分の体のことなのになぜ他者の同意が必要なのか」「なぜパートナーの有無を確認されなければならないのか」と強い嫌悪感を覚えました。結婚しておらず配偶者もいなかったため、なおさら理不尽に感じました。その後、ピル処方通院していたクリニックで「不妊手術を受けたい。妊娠の可能性をなくしたい」と相談したところ、医師から「何を言っているんですか。そんなの無理に決まっていますよ」と、私の意思をまるで「バカげている」というように頭ごなしに否定されたことがありました。こうした医師の対応からは、以前言われたような「配偶者の同意は取れているのか」という言外の含みが感じられますし、私の選択や意思が十分に尊重されていないように思います。私のように配偶者がいない者には訴える資格がないという国の言い分は誤っています。

以 上